実践女子大学公開講座 2021.11.20 sat

SDGsに関して教育現場でできること

開会挨拶：細江容子
（実践女子大学生活科学部生活文化学科教授）

教育の現場でSDGsを展開している先生方を日野キャンパスにお招きし、その具体例とポイントについて講演していただきました。実践女子学園の渡辺先生は、SDGsがさまざまな教育活動のハブになり、学びの楽しさを実感できることを呈示。また、日野第八小の取り組み報告や日野第六小の児童による発表では、6年間の系統だった学びを展開しつつ、家庭や地域を巻き込んだ横断的な取り組みを紹介します。それらを受けて、福井大学の荒井名誉教授が「家庭科」単一の科目の中でSDGsの17の目標をどのようにリンクできるかについてZoom講演していただきました。

講演 実践女子のこれから―「未来デザイン」

渡辺大輔
実践女子学園中学校高等学校
ESD推進主任

実践女子学園中学校高等学校では2020年度から週1回、「総合」の時間を活用し「未来デザイン」という授業をスタート。社会、環境、国際文化理解という3つの切り口でSDGsにアプローチしています。本発表では中2、中3生の事例を採り上げ、「教わる」のではなく「体験する、考える」教育の実際について語っていただきました。

中2の国際異文化理解セッション

当校ではグローバルシチズンを育成したいと考え、そのためにESD、持続可能な開発のための教育を展開しています。生徒たちに多様性を求めるには、私たちも多様であるべきだということで、現在17名、すべての教科の先生がESDに携わっています。このセッションは英語の教員が担当し、イントロダクションとして、日常の身近にある違いを通して文化とは何かを定義することからスタート。国家もさることながら、文化は集団やグループから生まれることを理解しました。

続いて、『地球の食卓』という写真集を教材として、フォトランゲージ、写真から文化を読み解く参加型アクティビティーを実施。この本は24カ国、30家族の1週間分の食材を公開した作品で、①グループで写真を見て気づいたことを話すブレーンストーミング、②「この国はどこ?」「主食は何?」「自分の生活と似ているところ、違うところは?」など、発想を広げる発問、③住んでみたい国ランキングを語り、自分の価値観にフォーカス。このようにフォトクリップを通して文化の多様性に触れ、世界の人びとの生活のあり方を考えました。

中3のSDGsセッション

私、渡辺が担当し、SDGsが持つ「持続可能」と「開発」という二つをテーマとした授業を行いました。まず、生徒に「自分は豊かだと思いますか?」では、「日本は、世界は」といった質問を導入として実施し、さらにグーグルフォームを使って生徒201人の回答を集計。一人ひとりにとって豊かさの定義が違うことへの気づきを促しました。この導入のねらいは、いきなりSDGsの17ゴールはこれですよ、日本の達成率はこうですよというところから授業を進めるよりも、SDGsが出てくるまでのプロセスを生徒に追体験させることです。それを踏まえて、SDGsのカードゲームをワークショップとして実施しました。

もう一つの授業は中3の社会・経済分野のセッションで、身近なものがどのように生産されているのか、自分はどんなモノやサービスを選択し、消費し、どう生きていきたいかを考える授業です。きょうのお弁当の材料は何かから始まり、肉や魚やチーズなど動物由来の食材をいっさい口にしないヴィーガンについて考えました。その善し悪しではなく、なぜヴィーガンという選択をしたのかの理由をみんなで考える、ここがすごく大切です。そのうえで生徒一人ひとりに「どのように家畜が飼育されることが望ましいか」「動物を食べないという選択は経済にどのような影響を及ぼすか」といった4つのテーマでプレゼンをしてもらいました。

高1の修学旅行を学びの集大成に

さらに中3を対象に環境の授業を展開し、ここでは小さな水槽で藻やメダカなどの生態系を作り、浄化のプロセスを観察しました。そこから地球サイズの環境保全がいかに難しいかを想像してもらうのです。仕上げは「私の行動宣言」ポスターを作成し、学んだことを行動につなげました。このほか授業以外では、スコレーという3日間の夏休み特別セッションプログラムを開催。10月11日の国際ガールズデーに合わせて、実践女子大学人間社会学科の山根澄香教授による特別ワークショップなどを開催しました。

本校では中1から高1までが「未来デザイン」の授業を受け、高1の3月の修学旅行において、各地が抱える環境や社会問題の現場へと実際に足を運び、体験し、そして分析を行います。現在はそれに向けて事前学習を行っている最中で、旅行先が自分たちの生活圏とどう違うのかなど、一人一つのテーマで記事を担当するガイドブックを制作しています。

今後は他教科との連携のみならず、学校行事とのコラボレーション、地域や企業との連携などを推進したい考えです。そして生徒たちには、より良く生きるための学びを通じて、進路、キャリアを展望する糧にしてもらいたいと願っています。

講演 SDGsに関して教育現場でできること

松永式子
日野市立第六小学校　校長

2019～2020年度、SDGsの東京都指定研究校である日野第八小学校での試みについて、松永先生からの発表。さらに現任校である日野第六小学校の実践について、担当の先生がた、ならびに6年生10名がSDGsへの取り組み成果を発表してくれました。

研究を進める際の三つの柱

私たち日野第八小学校は、東京都と日野市の研究委託を受けて、ESDの研究に取り組んできました。その切り口としてSDGsを採り上げましたが、研究を進めるにあたり、以下の3点を柱にしました。

①カリキュラムアセスメントの推進：生活科と総合的な学習を軸にアセスメントを行いました。SDGsのどの目標に今学んでいることが関連しているかを意識。そして学習のフィールドを身近な環境から徐々に世界的視野へと広げられるよう6年間を系統立てました。

②ホールスクールアプローチ：全教室に標語を設置するなど、学校の教育活動の全般でSDGsやESDの概念を浸透させました。SDGsは新たな取り組みではなく、今まで学校教育で行ってきた実践が持続可能な社会を作っていく。だから児童がまず意識してSDGsに触れてみようと促しました。

③課題解決学習を軸とした授業改善：文科省のESDの手引きを参考に、ESDの構成概念と資質能力の明確化に取り組みました。課題を子どもたちが「自分ごと」として捉え、問題を共有できるよう教師が発問し、気づきを促しました。

第八小学校の活動例

第1学年：「浅川で遊ぶ」→いつも遊ぶ川で、「ゴミが落ちているなあ」といった気づきをうながす。（▶SDGs14番）

第2学年：「つながろう、町のすてき探検隊」→「コロナ禍で心配だったことは?」など質問を用意して町のみなさんの声を聞く。（▶SDGs11番）

第3学年：「障害って何だろう」→地域の障害のある方を招き、交流会を設定。事前に障害者の暮らしについて調べ、その知識を活用した。（▶SDGs3番、11番、17番）

第4学年：「用水路クリーン作戦」→きれいな水が潤沢な日野市の用水路を歩き、気づきや課題を発見する。（▶SDGs14番）

第5学年：「私たちの環境を守ろう」→ウェビングマップを活用し、環境問題における共通点を見いだし、大きな視点を得た。（▶SDGs7番、12番、13番、14番、15番）

第6学年：「地域の外国人との交流」→市の国際交流センターの方々にご協力いただいた。（▶SDGs10番、16番、17番）

1年半にわたる研究活動を終えて行った児童意識調査では「課題を設定したり、解決の見通しを展望したりできるようになった」という肯定的な回答が、当初の72%から88%に上昇しました。

八小では環境からスタートしましたが、児童が学ぶ入り口は一つだけでいいのです。そこから住みよい町づくり、パートナーシップ、多様性など様々なオプションについて考えが広がります。学校でできることは、児童の手を引いてあげたり、道を開くヒントを与えたりすること。失敗するかもしれませんが、子どもたちの力を信じ、できるだけ機会を提供するよう心がけることが大切だと実感しました。　（以上、松永式子校長）

日野第六小学校の報告

①「4年生のSDGs学習」報告

（発表:山本英征主任教諭）

社会科の「ごみはどこへ」の授業から、総合的な学習の時間へ発展させました。日野クリーンセンター改装を機に、オンラインで清掃工場をつなぎ、ゴミ問題を身近に感じてもらいました。その後、日野市のゴミルール改正をきっかけに、「知ってるかな?」をフックに授業を展開。どんなプラごみが出て、どう分別しているか子どもたちに投げかけました。最終的にリーフレット、ポスター、クイズなどを作成し、SDGsに足を踏み入れたことを実感できました。

②「SDGsの取り組み―日々の学習の中で」報告

（発表:日野第六小学校6年生、小見嘉孝教諭）

環境問題について調べたことを全校朝会でみんなに発表したい。子どもたちが自発的に申し出て、スライド、資料など休み時間も利用して準備し、発表を通じて活動の輪を広げました。

①「人間がやってしまった環境破壊」：食品ロスの現状、ゴミ減らし隊の活動、森林破壊を知ろうなど。（▶SDGs2番、12番、15番）

②「ヒートアイランド現象」：公共交通機関を使う、エアコンをつけっぱなしにしないなど、誰でもすぐにできる対策を示しました。（▶SDGs7番、13番）

③「海洋問題、水質汚染」：一因であるプラスチックごみを減らすため、リサイクルの大切さを訴えかけました。（▶SDGs6番、9番、12番、14番）

講演

家庭科という教科から見たSDGsの授業作り

荒井紀子
福井大学名誉教授

渡辺先生、松永先生の発表で示された「一つの教科から活動を広げていく」取り組みを受け、荒井先生の発表は「家庭科という一つの教科の中でSDGsの17目標へ」つなげる試みです。著書『SDGsと家庭科カリキュラム・デザイン――探究的で深い学びを暮らしの場からつくる（2020）』などをベースに、家庭科教育の視点から報告していただきました。

ほとんどのSDGs目標は家庭科で解決が可能

環境破壊やアフガニスタンの混乱などで生活が破壊されるのを目の当たりにし、ジェンダー、格差など世界共通の問題として深刻さが見えてきました。そんな中、課題に向き合って粘り強く解決にむけて考えられる人が、教育の中でとても大事になってきています。SDGsの目標のベースには環境問題があり、その上に社会、経済などの諸問題が重なり、これをパートナーシップで解決していこうというものです。私は17の目標を見たとき、ハッとしました。「これはみな家庭科でできることではないか!」と。家庭科とは私事を勉強することであり、私が行動主体です。例えば貧困をなくすということは、家庭科では家族の問題や生活設計の問題につながります。福祉やジェンダーの目標は、家庭科の福祉、高齢者共生社会という内容とリンクします。

新学習指導要領のもと探究的な学びをどう作るか

新しい指導要領のもとでの家庭科の特徴としては3つあります。

①資質・能力と目標の関連を明確化：児童・生徒が生活に関わる知識や技能を習得し、生活の中から問題を見いだして課題を解決し、より良い生活に向けて主体的に行動する実践力を育みます。

②学習内容を領域横断的に貫く4つの視点の明示：家族、衣食住、消費、環境などに関わる生活事象を、「健康・快適・安全」「協力・協同」「持続可能な社会」「生活文化継承創造」という家庭科の視点で捉えることです。

③問題解決的な学びと学習プロセスの提示：最初に課題を発見し、どうすべきかを考えて実際にやってみる。そして学校だけでなく家庭へとつなげていくよう授業を組んでみましょうということです。

ストーリー性と探究を組み込んだ授業実例

福井大学教育地域学部附属中学校1年生を対象に、「素材を味わう―食の主体をはぐくむ」という題材で、世界の人びとは何を食べているのだろう?という視点から食と消費をつなぐ学びを行いました。地場産サツマイモで無添加のおやつを作り、ラベルも制作しましたが、特に男子が張り切っていました。また、4種類の市販のハムを並べ、自分ならどれを買うか、その理由について発表し合いました。ある生徒はアレルギーに着眼し、別の生徒は添加物が決め手となるなど、それぞれが選ぶ基準が異なっていることも併せて認識できました。

もう一つは、先ほど渡辺先生の発表にあった『世界の食卓』を用い、ある国のある日の食事を描いてみようという試みです。この授業には、健康・福祉、そして飢餓・貧困の問題が含まれています。生徒たちは、自分の中の「あたりまえ」が変わった、購入の際に食品表示を読むようになったといった感想を述べてくれました。この「あたりまえ」を学習で崩していくことが大事だと改めて思った次第です。

プロセスを大切にし、クリティカルな思考を養う

SDGsでは、子どもたちがプロセスにどう取り組んでいるかという形成的評価が大事です。本日の日野第六小学校の発表では、生徒自身で目標を定め、どこまで達成できたかを生徒自身の作品（レポートや実践を含む）で評価するすばらしい取り組みでした。また、プラごみ問題の発表にあったように、きちんと分別してゴミを減らすことが重要だというところへたどりつきました。そのうえで、スーパーでちょっと買い物しただけでたくさんのプラごみが出る現状に目を向けること。システムとしてどう変えていくことができるだろうかといった、クリティカルな見方が必要となります。そこまで考えられる子どもたちならば、きっと次の世代を切り開いてゆけることでしょう。